文章上達の思考法

―文章展開の四種類―

渡辺　知明

1　文章の種類の区分

一と口に文章といっても、さまざまな種類があります。わたしたちの身近にはどんな文章があるでしょうか。新聞ひとつをとっても、記事、社説、コラム、連載小説、談話など、どれも文章の性質にちがいがあります。

これまで、文章の種類を区分するには、いろいろな分けかたがありました。文章の種類を大きく二つに分ける方法にもいろいろあります。「説明と描写」、「説明文と文学文」、「実用文と芸術文」、「理論文と文学文」などと分けられています。しかし、このようなジャンルに分けても、わたしたちの文章能力を高めるためには役に立ちそうにありません。すべての文章に共通する原理的な区分がほしくなります。

そのひとつの基準となるのは言語の基本的なはたらきから区分する方法です。それには、大久保忠利の工夫した「言語能力の三区分」の図が参考になります。（詳しくは、日本コトバの会編『コトバ学習事典』一光社30ページを参照）

わたしたちは、場面や話題ごとにコトバの意味をかなり自由に変化させて使っています。そのような日常の話しコトバや文章の特徴を大久保は「1日常言語」とよんでいます。この言語は「雑義的（意味が混じりあって）、生活に密着」していますが、ほかの言語の母体であり、そこから純粋な要素として磨きぬかれて取り出されたものに「2理論言語」「3文学言語」があります。

「2理論言語」には「①真理性、②一般性、③実践性、④論理性」の性質があります。おもにモノ・コトを科学的に論ずるときのはたらきです。また、「3文学言語」には「①虚構性、②個別性、③表象性、④情感性」の性質があります。おもにモノ・コトについて、文学的に論ずるときのはたらきです。

わたしたちが実際に見たり聞いたりするコトバはずいぶん複雑なものですが、このような言語の三区分をひとつの物差しにすれば、話や文章に性質のちがいがあることが分かります。

それなのに一般の文章指導では、このような言語の区分もされないままに、ばくぜんと論じられています。文章の上達のためには、日常言語のはたらきではなく、むしろ「2理論言語」「3文学言語」を意識的に学ぶ必要があります。

ちなみに文章のジャンルも言語の三区分を基準にして、つぎのように分類できます。

a理論的展開の文章……論文・説明文・論説文など
b文学的展開の文章……小説・物語・随筆など

ただし、この二つの要素は、それぞれの文章に混じっているもので、どちらか片方だけで書かれているのではありません。aが理論言語のみで書かれているわけでもないし、bが文学言

語のみで書かれるわけではありません。どちらの文章の展開にも、部分的にそれぞれの要素が多かれ少なかれ含まれています。

2　文章展開の四種類

言語のはたらきの本質を「2理論言語」「3文学言語」と分けましたが、さらに文章の展開を具体化したものとして、つぎのような文章展開の四種類があります。これが文章の展開や段落の組立てを考える基礎となります。（澤田昭夫『論文のレトリック』講談社学術文庫）

①説明　②論証　③描写　④物語

それでは、この四つの展開の基本的な意味を説明しましょう。各項目ごとに澤田昭夫の説明を引用したあとで、わたしの解説とコメントをつけ加えます。

澤田氏は「論文の展開は問いに答えながら書かれる」という考えに立っています。ですから、このあとの引用も想定された「問い」との関係で説明されています。もちろん、四つの展開の性質は論文に限られるものではなく、一般の文章すべてに応用できるものです。

①説明 exposition

聴衆、読者に対して情報を与える、理解させる、明らかにすることです。「それは何であるか（あったか）」という問に答えることだといってもよいでしょう。「それ」はものでも、ことがらでも、ひとであってもよいし、概念であっても、ある主張に対して向けられたひとつの主張であっても結構です。「何であるか」という問は、「その外見は」「その構造は」「その重要さは」「その意義は」「その本質は」「その機能は」「その原因は」「その結果は」と多様な形をとり得ます。

「①説明」と「②論証」の展開は、おもに理論的な文章に多く見られます。とくに「①説明」は文章を書くときの基本です。昔の作家などは、小説の文章を「説明と描写」に分けて考えていました。コトバの定義、用語の説明、コトバとコトバの体系における〈具体→抽象〉とに関連します。ただし、理論文でも具体例をあげるような部分では「③描写」や「④物語」の展開も使われます。逆に、小説や随筆は「③描写」と「④物語」を軸に展開されますが、問題を掘り下げるような場合には、「①説明」「②論証」の展開も使用します。ただし、小説や随筆では、その文脈が「語り手」のコトバか、「人物」のコトバかという視点の問題がかかわってきます。それは書き手自身の経験を書く場合にもついてまわります。

②論証 argument

一定の主張が正しい、真実であることを相手に認めさせる、知的に確信させることです。「この議論、主張の推論は正しいか」という問の答えだといえましょう。論証には、「彼にはアリバイがあるか」「憩いとしてのレジャーは文化の基礎か」という事実関係の問に答えるものと、「公務員の政治活動は禁止さるべきか」「不寛容なものに対してまで寛容であるべきか」「国鉄は民営化さるべきか」というような法的関係ないし当為（なすべ

し、なすべからずの）問題、政策関係の問に答えるものがあります。

「②論証」は、大きい文章の構成でいうならば、論文の展開に代表されます。「問題提起→仮説→証明（実験・観察）→結論」という展開です。もちろん、もっと細かい論のつながりにおいても見られます。

「論証」と似ている「説得 pursuasion」との区別については、澤田は次のように述べています。

「説得も知的論証を含むことがありますが、その目的は相手にこちらの立場を知的に認めてもらうことだけでなく、一定の行動を起こしてもらうことです。論証は何よりも知的、論理的活動、説得は心理的活動です。相手の感情、意志、下意識に訴えて一定の行動をとらせる。「これをしないでおいてよいか」というのが説得の問です。」

③描写 discription

もの、人物、状況、場所、行動を読者、聴衆の想像に訴えて追体験、共体験させるように迫真的に再現することです。「どんな印象、イメージ、連想を生み出すか」、という問に答える活動だといえましょう。

「③描写」と「④物語」とは、文学的文章の中心となる展開です。「時間」と「空間」を設定した表現と考えられます。「③描写」とは、描きだすモノを空間に配置して、目に見えるように描きだす表現です。その特徴は、時間を停止させた状態で、対象（見たもの・想像したもの）のイメージを文によって分析・総合することです。

④物語 narrative

「それがいかなる変化をとげたか」「何が起こったか」という問に答えて、人、制度、思想、状況、政策その他あらゆるものがどういうふうに変化したか、その変化過程、初めから終りにかけての経過を臨場感をもって語るのが物語です。自動車の組立て順序の説明や米の作付け面積減少統計にも、ことがらの時間的継起があらわれますが、そのような表面的経過記述は本来の物語、内面的深層物語ではありません。

「④物語」は「③描写」と対（つい）になる展開の仕方です。「描写」が時間をゼロとした空間中心の書き方であるのに対して、こちらは時間が中心の軸となって、空間は二次的なものと考えられます。子どもたちの文章にある「……しました。それから……。それから……」と、できごとを時間の流れのままに書き連ねた文章はこの展開の代表的な例です。ただし、たいてい「時間」も「空間」も意識しないで思いついたまま書かれていますから「物語」の展開としては貧しいものです。

ところで、「小説の会話の文章はいったいどこに入るのだろうか」と思われる方もいるでしょう。たしかに、小説の文章は一見して「地の文」と「会話」に区分できます。しかし、それは見かけのうえのことで、文章の機能からのものでありません。会話も以上の四つの展開のはたらきにしたがって考えるべきで

す。ある人物の会話も、何かを「説明」したり、何かを「論証」したり、何かを「描写」したり、何かを「物語」ります。ただし、ある会話が単一のはたらきをするわけではなく、いくつかのはたらきをかねています。

3　文から見た四つの展開

このように、どのような種類の文章も四種類の展開の要素を組み込んで成立しています。じつは、この四つの展開が成り立つのは、もともと一つの文の性質に展開の基礎があるからです。論理学の「判断」でも、このような文の性格の区別が考えられています。速水滉『論理学』（岩波書店）には、哲学者ヴントの考えが紹介されています。

論理学でいう「判断」というのは、主概念（主部）と賓（ひん）概念（述部）との結びつきです。つまり、主部（ナニガ・ダレガ）と述部（ドウダ・ドウシタ）の組み合わせなのです。

ヴントは、述部である賓概念の性質のちがいから、「①物語的判断」「②記述的判断」「③説明的判断」と三つの文の種類を区別しています。これは文章展開の四種に対応するものですが、ここには「論証」の要素が欠けています。それは「判断」の分野でなく論理学の全般にかかわるものと考えられたためでしょう。

もともと、判断とは「文」にかかわるものです。しかし、この考えは文の性質の理解にとどまらず、文章展開の四種の理解もたすけてくれます。あとの引用文の文語的いいまわしや漢字かなづかいは一部を現代語に改めて示します。

①物語的判断――述部が事件または状態を示す判断です。例文には「シーザーが（主）ルビコン河を渡った（述）」「月が（主）輝く（述）」があげてあります。ただし、述部の動詞が「一定の時間的関係を含む動詞であっても……賓位〔述部〕が動詞の現在形で一般的関係を言い現わす場合には、その性質は第三の説明的判断」に接近します。たとえば、「車は走る」には「車（というもの）は走る（ものだ）」という一般的な判断の表現なので説明的になります。

②記述的判断――述部が主部の性質を表す判断で、文章展開の「描写」にほぼ対応します。例文には「空が青い」「この机の色は赤い」があります。ただし、「空が青かった」「この机の色は赤かった」という過去形の判断になると、物語的判断の性質が加わってきます。なぜなら、純粋な記述的判断は、対象についての時間的関係にかかわりなくその性質を表現するものだからです。

③説明的判断――主部の「対象概念を説明するもので」「他の既知の対象概念と関係せしむるもの」といいます。つまり、あるコトバをすでに知られている別のコトバと関係づけることが「説明」です。例文として、「この本は小説である」「カントは哲学者である」をあげて命名的（名づけ）判断と呼んでいます。この判断によって科学的な定義や理論が組み立てられます。

以上の三つの判断の相互関係について、ヴントは次のように

まとめています。ちょっとむずかしい言い方ですが、ゆっくり考えながら読めば分かります。

「物語的および記述的判断は原始的（第一次的）判断であって、直観において与えられた全体表象を分析したものである。説明的判断はこれに反して思考の関係作用によってこの全体表象を得、さらにこれを分析したもので、第二次的判断に属する。」（ヴント「哲学体系」第一巻三五頁）

ここから、判断の種類と認識の発展の関係がわかります。「①物語的判断」と「②記述的（描写的）判断」は、「原始的（第一次的）判断」という初歩的な判断です。できごとのとおり、見たとおりを書いた文になります。しかし、これは「第二次的判断」である「③説明的判断」に発展します。これはモノ・コトを名づけたり、別のコトバと関係づける判断です。

つまり、できごとについて時間を追って書いたり、見たものを描写をすることよりも、ものごとを他と比較したり、分類する表現の方がむずかしいのです。ですから、文章の指導も、このような段階に応じた方法を工夫して、発展的にすすめる必要があります。

（つづく）

【参考文献】
①日本コトバの会編『コトバ学習事典』一光社
②澤田昭夫『論文のレトリック』講談社学術文庫
③速水滉『論理学』岩波書店

日本コトバの会編『あゆみ52号』（1995/12）所収